第1章

関係者各位より

文集

HANDS世田谷20周年

ケアズ世田谷10周年に寄せて

≪掲載順≫

＜利用会員＞

飯田　洋
佐藤旬子
塩崎美弥

＜介助会員＞

秋谷光隆
石山信成
桑山洋一
小杉　譲
下西尚子
中村健一
西川一哲

＜スタッフＯＢ＞

篠部洋介
名執真緒
松山智美
向　温子
山根幸子

＜関係者＞

小佐野彰
川西浩之
金重泰行
望月芳子
桜井征夫
中西正司

＜理事＞

赤平　守
荻野陽一
齋藤明子
樋口恵子
堀内万起子

世田谷区　区長

熊本哲之

これまでHANDS世田谷・ケアズ世田谷と深く関わって下さった方々からメッセージを頂きました。

飯田　洋
現利用会員

「HANDS世田谷・ケアズ世田谷とぼく」

ぼくは身体が不自由で誰かの助けがなければ日常生活も満足に送ることができません。27歳ごろまでは同居している両親が介助をしてくれていたのだけど、二人とも年のせいか体力的にぼくの介助を続けることが難しくなってきました。そこで『ケアズ世田谷』さんにヘルパーさんを派遣してもらうことにしたのです。

最初、ヘルパーさんを頼むことについて、親の負担が軽くなるのは嬉しいことだけど、痰の吸引や体位の変換など、ぼくの介助にはいろいろ難しいところがあるのでちゃんと慣れてもらえるか、気管切開しているせいでかすれているぼくの声がうまく伝わるか、家族でも親戚でもない方に自分の生活の一端をまかせても大丈夫なのか――とにかく不安だったんです。

ケアズ世田谷のお世話になり始めてから6年の月日が経ちましたが、当初感じていた不安な気持ちは消えてしまいました。ヘルパーの皆さんにはたいへんお世話になっています。そして、それは平時だけのことではありません。急に体調が悪くなって病院に行った時も一緒に付いて来てくれました。やはり困ったことがあった時、すぐそばに頼める人がいるというのはとても心強いです。

いつもぼくの生活をサポートしてくれているヘルパーの皆さん、そしてヘルパーさんの調整や社会の窓口に奮闘してくれるスタッフの皆さんには感謝しています。もし、ケアズ世田谷さんに頼んでいなかったら、ぼく自身か両親が倒れていたかもしれません。

今のぼくの生活はHANDS・ケアズ世田谷さんと両親の支えによって成り立っています。自分の生活なのに当人が関わらないのはおかしい話かもしれません。身体にハンデの足りない部分はHANDSさんに補ってもらえば自分の生活に当人が関わることができ

るのです。難しいだろうけどHANDSさんと協力したらきっとうまくいくと思っています。
今までも、そしてこれからもHANDS・ケアズ世田谷さんにはお世話になると思いますが、末永くよろしくお願いいたします。

◆----------◆

佐藤　旬子
現利用会員

20年前と言えば、父が病気になり、闘病生活が始まった頃でした。
母が家を留守にする事が多くなり、私も就職を始めたばかりで、身体の使い方が解らなかった頃でした。
友人達が入っていた事もあり、HANDS世田谷に登録しました。急な依頼にも対応してくださり、随分助かったのを、覚えています。
これからも、宜しく御願い致します。

◆----------◆

塩崎　美弥
現利用会員
「HANDSと私」

私がHANDSと関わったのは、初期の事務局長だった山口成子さんと知り合ったからです。
「美弥ちゃん、今度介助者を集めて、障害者の生活を助ける仕事を始めようと考えているんだけど、美弥ちゃんも参加しない？！」とおっしゃって下さいました。
その頃、私は自立生活をするきっかけを探していたところだったので、喜んでお成さんの誘いにのりました。

さて、皆さんご存知ないかと思いますが、実は、私が＜HANDS世田谷＞の名付け親なのです。
当初は＜HANDS　FOR　HANDICAPPED＞（意味・障害者の生活を手伝うこと）だったのですが、長すぎるので＜HANDS世田谷＞としました。
もう20年前の出来事になるのですね。

当時はお成さんのアトリエを借りて事務所とし、フリーマーケットとかカンパのお金を資金に、お成さんらしく、アットホームな雰囲気で運営していました。

その後、代田に事務所を移してからは、よく東急ハンズと間違われていました。
　例えば「椅子を作りたいんですが、何階ですか？」とか、「セーターを編みたいんですが、どこのフロアですか？」という電話の問い合わせがありました。
　当時のメンバーの顔ぶれを、今なつかしく思い出しています。

　最近は、利用者として、外野席から関わっている私です。
　地域で障害者が自立生活を続けることは、簡単なことではありません。でも私は、＜ＨＡＮＤＳ世田谷＞の皆さんのサポートによって、一日一日を大切にしながら私らしく自然に、努力を重ねながら過ごして生きていきたいと思っています。これからもよろしくお願いしますね。

　最後になりましたが、ＨＡＮＤＳ世田谷の 20周年とケアズ世田谷の 10周年にあたり、尚ご発展を一層祈念いたします。

秋谷　光隆
介助会員

　ＨＡＮＤＳ世田谷創立20周年、ケアズ世田谷創立10周年おめでとうございます。ＨＡＮＤＳ、ケアズを通じての縁が円を描き、今、私が在るように思います。たくさんの出会いと別れから、私自身を知り、変わることはなかったとしても、学びがありました。 アキラと呼んで下さったあの方に、歩くのが早い私はよくたしなめられ、その度に歩幅を合わせて歩いたことを思い出す時、きっと、それが私の原点であり、いつまでも大切にしたい想いと感じています。
　かけがえのない一期一会に感謝しながら、共に生きるということに真摯に向き合い、私自身を育んで活きたいと思います。 いつまでも、誰にとっても、想い在る場所であってほしいと願っております。

石山　信成
介助会員

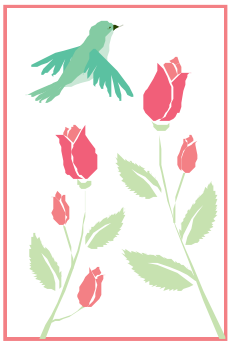
「ＨＡＮＤＳ世田谷20周年・ケアズ世田谷10周年に寄せて」

先日、「潜水服は蝶の夢を見る」というフランス映画を観ました。この映画は、フランスのファッション誌「ＥＬＬＥ」の編集長だった男性が突然、脳梗塞で倒れて全身麻痺になってしまい、唯一動かせる左目のまばたきだけで一冊の本（自叙伝）を書き上げ出版するまでを描いたお話です。これは実話がベースとなっています。映画の中では、出版社から派遣された女性編集者が主人公の男性に対して、アルファベットを使用頻度の高い順番で一音一音発音していき、該当する文字のところにきたら、彼がまばたきを一回して（イエスの合図）、彼女がそれを紙に書き留めます。この作業が延々と繰り返されます。20万回のまばたきの末に二人は一冊の本を書き上げました。

こういう映画を観るにつけ、人間の持っている無限の可能性というものについて考えずにはいられません。映画の主人公は自らのおかれた厳しい状況の中で、自分自身の真の力を見出し、そしてそれを行使したといえるのではないでしょうか。それは自分の想像の枠を大きく超えた出来事だったはずです。私達の内部には障壁を乗り越えるための無限ともいえる強力な力が秘められていると思います。ただ、その「力」の存在について私たちは、気付いていないだけなのかもしれません。そして、その「力」の行使を阻んでいるものがあるとすれば、それは自分を取り巻く外的環境でしょうか、それとも「自分に制限を課してしまっている自分自身」でしょうか。私は後者ではないかと思います。

こちらでヘルパーの仕事をさせて頂いて8年程になりますが、その間、多くの失敗も含めて沢山の貴重な経験をさせて頂きました。私の中で、それらの出来事のひとつひとつが黄金の輝きを放ち続けています。このような機会を与えて下さった利用者の皆様とその御家族、そして職員の方々には心より感謝しております。

前述の映画の話に戻りますが、利用者の方々とこの映画のようにひとつの目標に向かって協調することができれば素晴らしいなと日々、思っています。



桑山　洋一
介助会員

「ＨＡＮＤＳ世田谷20周年・ケアズ世田谷10周年に寄せて」

ある生協の送別会でのことでした。送り出される青年が同僚にたずねました。

「ところで、介助とはどういうものなの」この青年は、かねてより同僚たちの間で交わされる「介助」という言葉が気にかかっていました。「どうせなら君もやってみたら」という同僚の一人の言葉によりＨＡＮＤＳ設立時からかかわっているある方を紹介された。やがて青年は酒の商社に転職して直営店で働くことになりました。舌をかみそうな名前のワインの勉強をしたり、ビールケースを担いでお客さんの車まで運んで、売上目標達成にまい進する生活が始りました。その生活の中で月一度の泊まり介助をするようになりました。最初は少しだけ覗いてみようと思って始めた青年でしたが、成り行き上、以来ずっと続ける事となりました。

当時は個人的なつながりが全てでしたから頼む方の必死さが伝わってきました。介助の中でバス乗車拒否の話を聞いて権利擁護について考えたりしました。

近年は法律も整備されつつあるため交通機関や建物も利用しやすくなってきました。通勤通学といったことを中心に作られた交通体系もミニバスを使って地域の生活の足としての役割を担うようになってきました。比較的少ない需要に目を向けるようになったのは車椅子でバスに乗る運動も影響しているのではと思います。数年前の記事でしたが、関東一円のホテルでバリアフリー化の競争が行なわれているとありました。宴会場で行なわれる結婚披露宴では親族の中に車椅子を使う高齢者がいて、設備に配慮のないホテルは選んでもらえないということでした。負担ばかりではなく設置者のところに利益として返ってくるということです。このようなことはまだ一杯埋もれていそうです。近年は、介助が事業者を通して行なわれるようになり、以前よりは仕事として認知されるようになりました。その反面利用者との関係が少し遠くになった気がします。しかし、介助者という立場は世間から充分に処遇されているとは思えません。介助者自身から世間に訴える必要があります。そのとき、当事者自らの運動で介助保障を獲得してきた歴史から勇気をもらいます。

さて、あの青年はその後どうなったのでしょう。立派な？中年になってケアズのヘルパーをしているようです。いまだ昔の癖が抜けずワインのビンを見つけると表と裏のラベルをジロジロと見てしまいますが許してやってください。

小杉　譲
介助会員

私がケアズに出会って、もう1年半になります。

ある求人ホームページでここケアズの介助者募集の記事を見つけました。今となっては、そこに掲載されていた写真に写っていたのは当時のケアズ・ＨＡＮＤＳ職員の方々だったと分かるのですが、何も知らなかった私はその写真をみて、「利用者の方もこんなに笑顔で楽しそうにしているなら、臆病な自分でもここで安心して働けるはず！」と、そんなことを思い、即座に電話をし、今まさに思ったことを電話口でそのまま伝えました。

(その時対応して頂いたのは恐らく、というか確実に山形さんだったと思います。)
その電話で山形さんから懇切丁寧に、「あの写真ですね、なにを隠そう全員うちの職員なんですよ、はっはっはー」と説明して頂いたのですが、私はいまひとつ理解ができていないまま、面接の日程を決めて、緊張しながらＨＡＮＤＳ事務所へと向かいました。そしてハードコアなジャージを着た範夫さんの面接を受け、様々な説明を受けた上でやっと山形さんの言っていた意味になんとなく気づきました。

自立生活の考え方など、まったく知らなかったということが逆に私の興味を掻き立て、研修などで聞く話には次から次へと納得して心底共感したので、自分もその一部となることに喜びも感じました。

前職がユニクロの店員であった私にとって、求められたことだけを全力でやるということは得意中の得意であり、また海外での生活経験が長かったので、相手の言葉をきいたり、きき返すということにも慣れていたので、介助の仕事はまさに自分が出会うべくして出会った仕事ではないかと、時折思うことがあります。

「指示をする者と指示を受ける者との関係」は一見とても無機質でストイックな関係のようにもみえますが、そこにあるのはやはり人と人との関わりでもあります。介助という仕事は、常に可能な限り心も行動もニュートラルでありながら、相手の気持ちを汲むということも大事なことだと感じます。

気がつけば私の目標は、「決して余計なことはせず、それでいて利用者の方にとって痒いところに手が届くような介助者になりたい」というものになっていました。

そして私は自分の自立生活が、みなさんの自立生活によって成り立っているということを日々感じて感謝しています。同じような体験をこれからも多くの人にして欲しいと思うと、私はケアズ・ＨＡＮＤＳの次の10年にも期待せずにはいられません。

下西　尚子
介助会員

ＨＡＮＤＳ世田谷20周年・ケアズ世田谷10周年おめでとうございます。

当会の活動の歴史、そしてここまでの道のりに相当のご苦労があった事は聞いた事しかなく、たった在籍10ヶ月の私が語ることはもちろん出来ません。ただ、僅かな期間でもこうして携われている事を嬉しく思います。

振り返るにはまだ早いですが、ケアズと出会いヘルパーを始め今日に至るまで……。新米ヘルパーながらも、既に沢山の出来事や思い出があります。人見知りかつあがり症の私が、初めて利用者さん宅へガチガチの状態で行ったことが、今は少し笑い話になりました。また、介助という仕事を通じ、新しい『ものの見方』を覚えました。車椅子に乗る体験をした時、何気なく歩いている道もガタガタと砂利だのちょっとした段差にも振動を感じ、こんなにも凹凸の激しいものだったのかと驚いたり。また、利用者さんから言われて気付いた事も多々あります。例えば１階が駐車場、２階がお店というとあるファミリーレストラン。駐車場には車椅子用マークが記され、店内にも車椅子も入れるトイレが備わっているものの、肝心な入口までのスロープやエレベーターは無く、階段のみの矛盾した造りに違和感を覚えたり。他にも駅や公共トイレ、デパートでも車椅子対応である箇所が少なかったり、駅員さんによって障がい者手帳や愛の手帳に対する知識がまちまちで足止めをくらったり。外に一歩足を踏み出せば、思わずツッコミを入れたくなる様な場所や場面に遭遇する、と今まで気にとめていなかった事が見えたその数の多いこと。。

以前、研修で横山さんから「『知らない』というのは怖いこと」と言われた事があり、ようやくその意味を理解できる様になった気がします。

まだ未熟でありますが、少しばかりでも広がりつつある『眼』を今後も大事にしたいです。

中村　健一
介助会員
「ＨＡＮＤＳ世田谷20周年・ケアズ世田谷10周年に寄せて」

介助者として、ＨＡＮＤＳ、ケアズに関わるようになってから、10年になりました。ここまで続けてこられたのも、利用者、そして事務所スタッフの皆さんのおかげだと思っています。本当にありがとうございました。これからもよろしくお願いします。

10年の間に制度もずいぶん変わって来ました。これからも変わっていくと思います。ＨＡＮＤＳ、ケアズの役割も少しづつ変わっていくでしょう。

僕としては、利用者をはじめとするＨＡＮＤＳ、ケアズに関わる人たちの心のよりどころのような役割を期待しています。自分自身をどのような存在として認識し、受け入れ、そして他者に受け入れられていくのか。どんなふうに生きたいのか。どんなふうに社会と関わっていきたいのか。こんな問いの、答えを見つけるための、ヒントや、人の繋がりがあるところ。そんな場所として、これからもＨＡＮＤＳ、ケアズが光っていて欲しいと思います。

西川　一哲
介助会員
「おいわいのダンス」

しかし果たして介助に入るようになって 3年程度という僕に言えることなんてあるんだろうか？多分とても難しい。だからうまく言おうとするのはやめようと思う。

僕は言葉を書くのが好きで、書きながら思いを揺らしていくのが好きなので、いつものように、そんなふうにすることで、「おいわいの踊り」に代えさせていただこうと思う次第であります。

さて。とはいえテーマは必要だ。「ヘルパーをしながら何を学んだか？」ではどうか。

しかしその問いに僕はうまく答えきれない。なぜだか僕の頭の中には幾層にもグラデーションされたような思いがあるようだ。うむ。率直に言って僕は長い時間を掛けてそれらを混ぜていくつもりでいる。であればですよ？「どうしてヘルパーになったのか？」という問いに替えてみればどうだ？答えてみよう。

ひとつめ。「友達がケアズの事務所で働いていたので紹介してもらった」その通りだ。ふたつめ。「『ジョゼと虎と魚たち』という映画の池脇千鶴が切なすぎたから」それも本当だ。しかしね。もう一枚思いを剥がせばそこには、僕の家の『家庭崩壊』があってそれはそれはつまり『母親の自殺』をも含んでいて、残された息子としての僕は、その歪みまくった家庭環境のなかで、自分のバランスが滅茶苦茶になっていることを理解する必要があって、それから、その『歪んだ家庭』の磁場を司っていた僕の父もまた（その子供時代に）損なわれた環境で育っていたことをも、知らなくてはならなかったこと。それらを踏まえてつまり（やれやれ、ずいぶん大袈裟だ）ヘルパーになった気がする。

ヘルパーになった3年前（それよりずーっと前から）、いわゆる居場所がうまく見つけられずに、生きるためのバランスを保つのに精一杯だったものだ。3年経って、3年経って…えー、3年経っても、やっぱりバランスを保つのに精一杯だ。（何か問題ある？）

僕は考える何かしら考えるどうせなら踊るみたいに考えていたい踊るみたいに考えてみ

たい。なぜだか、今は 3年前よりは『自分のことについて』ばかり考えることは少なくなったと思う。いつのまにか、だんだん『いろんな視点』や『いろんな思い』を見たくなっていた。僕はそれらを混ぜていきたい。捨てずに持っていくんだ。立派な答えなんてありっこないそれは変わっていく「いつも正しい」答えなんてないだから踊る。いつものように。未来のことはよくわからないけれど、僕は混ぜることをやめないつもりでいるのだ。

20周年、おめでとうございます。

篠部　洋介

元職員

座・高円寺（区立杉並芸術会館）職員

「人が出会うことからはじまる」

原一男というドキュメンタリー映画作家が好きだった。19歳のとき、千葉から総武線に乗って新宿のＴＳＵＴＡＹＡまで行き「さようならＣＰ」のビデオをレンタルした。強い言語障害のある出演者の言葉をよく聞きとることができず、正直わからなかった。だがしかし、モノクロ画面の中から溢れ出る訴え、とにかく強い「生きる」意志はしっかりと伝わってきた。

20歳のとき、アフリカのザンビアという国に 3ヶ月滞在した。広い空、マンゴーの匂い、ドラムのリズム、いまでも心に焼き付いている。環境が人をつくる、暑い気候の人々はコミュニケーションも熱かった。ハグや痛いくらいの力強い握手とともに、特に印象に残ったのが目を見て話すことだった。まさに穴があくくらい、話しているあいだ中ずっと目の奥を見ている。心の中を覗かれているようで緊張もした。だけど、片言の英語やジェスチャーよりも、なんと目が雄弁に語るのか、お互いが理解しあえるのか、という驚きの体験だった。

22歳、舞台に関わっていたときに障害者のみの劇団「態変」を知り、インタビューが掲載されていた、現代思想「身体障害者」特集を書店で手にした。その中でＨＡＮＤＳ世田谷と出会った。介助者として日々、毎日違う家に行き、年齢や価値観の違う人とある時間を共有する。びっくりな展開も日常茶飯事。日本にいながら毎日、海外旅行をしているようだった。利用者の方と接し、はじめに思ったことは「アフリカ！」だった。しっかりと目を見て、言葉をこちらが理解しているかどうか、一瞬一瞬が真剣勝負。見られている緊張感、しかし心地の良いコミュニケーション。

「いまここで」「あなたと」「はじまること」そんな出会いを繰り返した、いつの間にかの 10年でした。ほんとうにたくさんの出会いがあり、自分を成長させていただきました。

僕は現在、「いまここで」しか生まれない物語を創るため、劇場運営、演劇制作の仕事をしています。これもＨＡＮＤＳ世田谷があったからこそです。

20年間、果てしない人と人を結び、出会いを生んできたＨＡＮＤＳ世田谷に心からの尊敬と感謝を送らせていただきます。これからもがんばってください！

名執　真緒

元介助会員

「ＨＡＮＤＳがつくる明るい街」

ＨＡＮＤＳ・ケアズに出会ったのは、梅ヶ丘で「ボラバイト募集」という個人介助募集のチラシを見たのが始まりでした。個性溢れる利用者さんとスタッフの方々。エピソードは数知れず、楽しい思い出ばかりです。

電車の中でお話ししていて、利用者さんが大笑いしてしまったこと。乗客の方もダンボの耳でやりとりを聞いていたに違いありません。いつも一緒に大笑いしすぎて、利用者さんに「○○さん！息してください！！」と言うのが、お決まりになっていました。何とも面白いことばかりでしたが、胸がキュンとなるようなせつないこともありました。

家はまるで宇宙の様で、重力があるのではないかという位、その人らしさに溢れた空間でした。施設ではなく家だからこそ、こんなにもハートフルになるのだと思います。

ＨＡＮＤＳ・ケアズで介助の仕事ができた事、本当に誇りに思っています。車椅子を押して一緒に街を歩くのがとても誇らしかったです。利用者さんが歩くと街が明るくなるからです。

横山理事長のお話で一番印象的だったのが「Ａにとっての迷惑は、Ｂにとって迷惑でない」という言葉でした。痒いほっぺたをかくこと、涙をふくこと、食べること、すべてを介助者の手にゆだねている利用者さん。その一つ一つに感謝し「ありがとう」と言ってくれました。体に障がいを持つ方は、誰よりも人に感謝する機会が多いように思いました。そして何より「ありがとう」と言われた私たちの方が、ずっとずっと幸せな気持ちになりました。

すべての人、すべての生き物や自然。いらないものは何ひとつない。すべてのものが大切な役割を持っている。私たちの体の中の細胞や器官、土の中の微生物や菌の働き、光合成する植物、いろんな個性を持つ人間。何か似ていると思いました。

ＨＡＮＤＳに出会う１年前、フィリピンのゴミ山を訪れ、ひしめきあうスラムの家の中でトイレをしてしまったり、食べかけの残飯を拾って食べている人々を見ました。やせ細った子どもを見ても何をしていいかわかりませんでした。やっと決心がつき、今は看護の道を

目指しています。コンポストトイレや農業の知識も身につけ、途上国支援することを夢みています。

ＨＡＮＤＳの考えは普遍的ですべてのことに通じると思います。いつまでもＨＡＮＤＳ精神を持ち続けたいと思います。

自立生活の輪が広がり、ＨＡＮＤＳ・スピリットが全国、そして世界に広がりますように…。

松山　智美

元介助会員

「ＨＡＮＤＳ世田谷20周年・ケアズ世田谷10周年に寄せて」

まずはＨＡＮＤＳ世田谷20周年・ケアズ世田谷10周年おめでとうございます！私がＨＡＮＤＳ・ケアズに関わらせてもらったのは支援費制度が始まった 8年前。それ以前はいわゆる入所の施設でスタッフをしてました。もっと色んな人に出会って、色んな考えを学びたいと、在宅の、しかもＣＩＬに飛び込みました。同じ福祉の分野でも、私がそれまでいた施設とは全く違う考え方で、最初、私は戸惑いました。それどころか基本的な事しか教えてくれず、あとは当事者に聞いてくれと帰ってしまうＣＯに、まるで放り出されたかの様な孤独感さえ感じてました。でも少しずつですが、その意味が分かるようになってきました。そして私もコーディネートする時には「聞いてください」と言うようになってました。それはそうですよね。生活してるのはその方で、その方らしく暮らせる様にサポートするのがヘルパーの仕事。その方以外に「良い」も「悪い」も教えられるはずはないんですよね。それを教えてくれたのがＨＡＮＤＳでありケアズであり、そして私に関わってくださった利用者の方々でした。本当に感謝してます。ただそれは世間の福祉感とも違うし、一般的なヘルパーとも違うと思います。利用者さんにも、ヘルパーにもある意味、難しさと厳しさがあると思います。でもそれはよく考えたら当たり前の事。でもきっと今は「よく考え」ないと分からない事なんですよね。それがよく考えなくても当たり前になってもらえたら…ＨＡＮＤＳ・ケアズには、そんな風に当たり前だけど当たり前じゃない事を、これからも、私を含め一人でも多くの人に伝えていってもらえたら…と思います。これからの 10年も応援しています。

茅場　温子
(旧姓　向)
元職員

「ＨＡＮＤＳ世田谷20周年・ケアズ世田谷10周年に寄せて」

ＨＡＮＤＳ世田谷20周年・ケアズ世田谷10周年おめでとうございます。

私が在職したのはＨＡＮＤＳの20年間、ケアズの10年間の中でたった4年間ですが、今回、この20周年記念誌の原稿依頼をいただいてとてもうれしく思ってます。ＨＡＮＤＳは私にとって、社会人の第一歩を歩ませてくれた場所。いろんなことがありました。楽しかった思い出が多いですが、悲しい出来事も経験しました。その全部があって、今の私がいます。

平成18年の3月に「福祉の世界からちょっと離れます」と言って、ＨＡＮＤＳ世田谷を退職して早4年。ご挨拶に伺わなければ･･･と思いつつも、実家への引越しが急に決まってしまったため、きちんとご挨拶できず、申し訳なく思っています。私の近況はといいますと、昨年（平成21年）から千葉県内の某市役所の障害福祉課にてケースワーカーをしております。早い話が、福祉の世界、障害福祉の世界に戻って、ＨＡＮＤＳ時代までとはいきませんが、がっつり日々働いております。

行政の立場で障害者の生活に関わるようになりましたが、私の原点はＨＡＮＤＳ世田谷にあると感じることがよくあります。それは、物事を考えるときに、「こんな時、横山さんならどう考えるかな？」「今井さんなら、どう考えるかな？」と立ち止まることがあるからです。ＨＡＮＤＳ世田谷での4年間、障害を持つ方の生活に関わらせていただいたことで、他のワーカーとは違う視点で考えることができるようになったと思います。

ケースワークをしていく中で、ピアカウンセリングやＩＬＰを取り入れられたらどんなにいいかと感じることも多々あります。ＣＩＬ出身のケースワーカーとして、いかにそのＣＩＬらしさを出していけるかが、これからの私の課題だと思っています。

私がＨＡＮＤＳ世田谷を退職した平成18年からスタートした障害者自立支援法。退職するので、ちゃんと勉強していなかったのに、まさか行政職として関わることになるとは･･･。未来のことってわかりません（笑）。これからも場所は違えど、私も福祉の世界に関わり続けることになりそうです。こんな私がいることを覚えていていただければ、幸いです。

ＨＡＮＤＳ世田谷とケアズ世田谷が、利用者さんが、介助者さんが、ますます発展されますよう、心よりお祈り申し上げます。

Ｐ．Ｓ．大卒ピチピチだった（？）ムカイも三十路を超え、やっと先日お嫁にいけたことを、近況その2としてご報告させていただきます。